

いじめっ子生育の環境について

福永俊哉

(京都女子大学発達教育学部准教授)

教育学専攻入学者の必修授業「教育学入門演習 II」において、統計調査の基礎を理解すべくアンケート調査を実施している。いじめは、道徳と人権の問題が重なり合う社会的解決課題である。アンケートの考察からは、いじめは、親の目の充分に届かない「子ども社会の中で再生産」されていることが窺われた。人をいじめたことのない子は、弟妹を持つ姉で、専業主婦の母親の指導のもとで弱い立場の弟妹との付き合い方を学んでいることが想像できた。これに対していじめられっ子は、人をいじめたことのない子どもと同じく共働きでない親の元で育つが、塾、地域行事といった大人の関与割合の高い社会との交流が多く、近隣の大人と挨拶や立ち話をする割合も最も高かった。だが弟妹を持つことが少なく、「弱い者いじめをしない」「仲よくする」「優しく接してあげる」といった道徳的・人権的価値を指導される機会がなかったことが想像できた。

キーワード：いじめ、生育環境、家族、社会

1. はじめに

いじめは道徳上の問題であると同時に、命に係わる深刻な事態を引き起こす人権上の解決課題でもある。いじめの発生を防ぐための教育指導上参考となる「いじめっ子生育の環境」について考えておくことは、教育の場に出る教育学専攻の学生にとって大きな参考になると考えられる。

本学の教育学専攻1回生必修科目でのアンケート調査を通して、いじめっ子、いじめられっ子の生育環境の一端が見えた。簡潔に述べれば、いじめは、大人の指導下でない「子どもたち中心の社会集団」の中で再生産されているのではないかということである。アンケート調査の考察段階では、親の共働きの有無、兄弟姉妹関係、自然体験、生活体験との関りも見えた。

2. アンケート実施日、対象、目的等

(実施日) 2013.12.16

(対象) 発達教育学部教育学科教育学専攻

1回生必修科目「道徳教育論」受講者

・140部配布

・123部回収

(目的) 教育学専攻では、前後期にそれぞれ入門演習 I、入門演習 II として教育学の学びに配慮したアカデミック・スキル教育を実施しており、当該アンケートは後期の入門演習 II の統一シラバスに基づいて統計調査の入門的知識・スキルを獲得するために実施したものである。

筆者は担当クラスで独立行政法人国立青少年教育振興機構によって数年おきに実施されてきた「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」を念頭にアンケート項目を設定し、道徳的、人権的な諸価値の崩壊する焦点に位置する「いじめ」に着目した。

教育学専攻学生の多くは初等教育のキャリアへと歩み出していく。家族規模、兄弟姉妹構成、遊び、自然体験、生活体験、社会体験、習い事といった生育歴と「いじめっこ」「いじめられっ

子」の発生に注目して調査・考察を加えることで、教育者・保育者としての意識を強化できるのではないかと考えた。

3. アンケート項目

Q1.入学前の同居家族構成についてお教え下さい。

1.祖父 2.祖母 3.父 4.母 5.姉（人） 6.妹（人） 7.兄（人） 8.弟（人） 9.その他（具体的に）

Q2.保育園または幼稚園に何年間通いましたか？

1.保育園（年） 2.幼稚園（年） 3.行っていない

Q3.小学生の頃、両親が共働きでしたか？

1.はい 2.いいえ

Q4.小学校の授業が終わった後、どのように過ごしましたか？（複数回答可）

1.学童保育 2.家で一人 3.いここ、祖父母の家で過ごした 4.友達と遊んでいた 5.塾、習い事

Q5.小学生の頃、友達と遊ぶ場所は主にどんなところでしたか？（2つまで回答可）

1.学校 2.グラウンドや公園 3.自分の家や友達の家 4.家の周囲 5.その他（ ）

Q6.家の周囲の自然環境は豊かでしたか？

1.はい 2.いいえ

Q7.よく川で遊んだり、野原で遊んだりしましたか？

1.はい 2.いいえ

Q8.子どもの頃、お祭りや、地藏盆、お寺の行事など、地域の行事にはよく参加しましたか？ 1.はい 2.いいえ

Q9.大学入学前、1日1回以上、家族と一緒に食事をしていましたか？

1.はい 2.いいえ

Q10.あなたは両親とよく話をしていますか、またはしていましたか？

1.はい 2.いいえ

Q11.家（実家）の周囲（町内）の顔見知りの人と挨拶や立ち話をしますか？ しましたか

1.はい 2.普通 3.いいえ

Q12.子どもは好きですか？

1.はい 2.いいえ

Q13.人間は好きですか？

1.はい 2.いいえ

Q14.現在、人と話をするのは得意ですか？

1.はい 2.普通 3.いいえ

Q15.現在、人前で話すのは得意ですか？

1.はい 2.普通 3.いいえ

Q16.携帯やスマホを使って、友人や家族とのコミュニケーションは深まりましたか？

1.深まった 2.どちらでもない 3.浅くなった

Q17.現在、学業以外にどんな活動をしていますか？

1.クラブ 2.サークル 3.学校ボランティア 4.その他（ ）

Q18.現在アルバイトをしていますか？

1.していない 2.飲食関係 3.塾・家庭教師等、教育関係 4.その他（ ）

Q19.卒業後の進路はどう考えていますか？

1.保育士 2.幼稚園教諭 3.小学校教諭 4.中高教諭 5.民間就職 6.大学院

Q20.子どもの頃、いじめたり、いじめられたりした経験はありましたか？

1.いじめた 2.どちらでもない 3.いじめられた

4. アンケート集計結果

考察対象としたもののみ、下記表1～3にまとめました。

表1 「家庭環境・保育状況、放課後の過ごし方」（◎○△×の記号は、1～4の順位を示す）

	家庭環境と保育の状況					放課後の過ごし方				
	家族数	兄姉	弟妹	保育年	共働き	学童	一人遊	親戚	友達と	塾
全平均	4.4(人)	40.7%	77.2%	3.1	47.2%	8.9%	14.6%	14.6%	82.1%	72.4%
いじめ0	△4.4	×39.3%	◎83.3%	×3.0	×47.6%	×8.3%	×8.3%	×11.9%	△82.1%	△71.4%
いじめ+	○4.6	○52.6%	○68.4%	◎3.5	○68.4%	◎15.8%	◎31.6%	◎36.8%	×73.7%	×63.2%
いじめ±	◎4.7	◎62.5%	△62.5%	○3.4	◎68.8%	○12.5%	○31.3%	○25.0%	○87.5%	○75.0%
いじめ-	△4.4	△45.5%	×60.6%	△3.2	△48.5%	△9.1%	△30.3%	△15.2%	◎87.9%	◎78.8%

いじめっ子生育の環境について

※いじめ0は「いじめの加害も被害もない群」。いじめ+は「いじめの加害のみを経験した群」。いじめ±は「いじめの加害と被害を両方経験した群」。いじめ-は「いじめ被害のみ経験した群」。

表2 「自然・家族・社会体験、進路希望」(◎○△×の記号は、1～4の順位を示す)

	自然・家族・社会体験					進路希望					
	自然環境	自然遊び	地域行事	家族食事	近所会話	保育園	幼稚園	小学校	中高	民間	大学院
全平均	62.6%	43.9%	78.9%	81.3%	50.4%	10.2%	18.8%	61.7%	4.7%	16.4%	7.0%
いじめ0	◎66.7%	◎48.8%	△79.8%	◎85.7%	○47.6%	◎10.7%	◎21.4%	◎66.7%	×4.8%	◎19.0%	×3.6%
いじめ+	○63.2%	○47.4%	◎89.5%	○68.4%	△47.4%	×5.3%	○15.8%	×57.9%	○10.5%	×10.5%	◎15.8%
いじめ±	△56.3%	△37.5%	○87.5%	×62.5%	×43.8%	△6.3%	△12.5%	○62.5%	◎12.5%	△12.5%	○12.5%
いじめ-	×51.5%	×27.3%	×72.7%	△66.7%	◎57.6%	○9.1%	×12.1%	△60.6%	△6.1%	○15.2%	△12.1%

5. 考察

教育学専攻入学者の全体的な傾向としては、下記(表3)の通り高い人間愛を想像させるものであった。本考察は、そうした前提の上で、いじめに関わった経験の有無はどうした生育環境と関連しているのかについて考察するものである。

表3 「人間愛」

	人間愛	
	子供好	人間好
全平均	94.3%	95.1%
いじめ0	◎95.2%	◎97.6%
いじめ+	○94.7%	○89.5%
いじめ±	△93.8%	×87.5%
いじめ-	×90.9%	△87.9%

【いじめ0群】(いじめなし群)

教育学専攻は、幼稚園から小学校、すなわち幼児期から児童期の教育課程の教諭を養成する課程であるが、幼小教諭への進路希望を持つ学生のタイプを入学以前のいじめ体験を軸に分析してみたところ、いじめなし群が最もそうした進路に対する希望を抱いていたことがわかった(表2)。

このいじめなしの「いじめ0群」(人にいじめられた「いじめ-」群でも、人をいじめた「いじめ+」群でもない)の属性としては、人間愛の高さがあげられる(表3)。いじめをす

ることもないし、いじめをはね除ける強さも持っているのだろうか。彼女たちは、全般的に高い値を示す教育学専攻の学生の中でも、最も「子供が好き」(95.2%)で、最も「人間が好き」(97.6%)だと答えている。卒業後に保幼小の教育現場に出たいとする割合も、もっとも高かった。

このいじめ0群の生育環境の特徴は、表1から、(1)兄姉がいることが最も少なく、(2)弟や妹を最も持っている群(つまり姉)であり、また、(3)両親の共働き率は最も低く、(4)保育年数も最も少ない(3.0年)。したがって、学童保育で時間を過ごしたり、一人で遊んだり親戚の家(祖父母の家に預けられるのだろう)で遊んで過ごした確率も少ない。家族の平均人数は4.4人と最も少ない。

このグループの典型的な生育像としては、主として母によって弟や妹との関係を仲立ちされながら、年少者への配慮と年長者としての自覚を学びながら家庭で育まれたことが想像される。

またこの群は、表2から、いじめられっ子だった「いじめ-群」と対照的に、(5)自然環境が豊かな環境で、(6)自然の中で遊びながら成長したこともわかる。またさらに顕著であるのは、(7)家族と一緒に食事を経験していた率では、飛び離れて高い値を示している(85.7%)。

家族とのコミュニケーションの中で、その家庭教育によって年少者に対する行動のルールや弟妹への愛情行動という形で人間愛が育まれていたのではないだろうか。

【いじめ±群】（いじめ関与群）

いじめっ子（「いじめ+」）であり、かついじめられた（「いじめ-群」）経験をも持つ、いわゆるいじめ属性を持つのが、このいじめ関与属性群である「いじめ±」である。この群の特徴としては、(1)兄や姉がいた割合が高い（表1）ことがあげられる。家庭での兄弟との関係から、いじめ経験が生じているのではないかと考えられる。

注目すべきは、いじめ経験を持つこの群で兄弟のいる確率は、弟妹のいた確率と同率の62.5%であることである。(2)兄姉と弟妹の間には生まれた兄弟姉妹関係の中から「人をいじめたが、自分自身いじめられもした子」が生まれてきたことが想像される（表1）。

また、いじめられた経験のないいじめっ子である「いじめ+属性」群は、(3)家庭外での保育期間が最も長い（表1）。その他にも、いじめ属性を持つ子どもの特徴としては、(4)両親の共働き率が高く（表1）、(5)学童保育や一人遊び、親戚の家など親の目の届かないところで過ごしている（表1）。

いく人かの気の合う友達と一緒に自由に遊んだり、塾に行ったりして過ごした経験の低さ（表1）も、いじめ属性が家庭での兄弟姉妹関係の中から生み出されているものであることが想像される。

【いじめ-群】（いじめられっ子群）

いじめには回っていない純粋な「いじめられっ子」の特徴としては、いじめ0群同様に兄弟姉妹の人数が最も少なく共働き率も少ない一方、(1)弟妹のいる確率が最低であることがまずあげられる（表1）。いじめなし群が弟妹のいる確率が最高であることと対照的である。

年下の弟妹をどのように思いやって守ってやるかということを体験的に理解していないこと

が、逆に自分がいじめられることを生み出す原因となっているのかも知れない。

いじめられっ子たちの放課後の過ごし方として特徴的であることは、(2)友達と遊んだり（表1）、(3)塾に行ったりしている（表1）ことである。母親やその他の大人の教育的配慮や眼差しの及ぶ学童保育や家庭内での一人遊び、親戚の家（祖父母宅）で放課後を過ごしてすらいない（表1）。いじめられっ子群はまた、(4)家庭周辺の自然環境に乏しく（表2）、(5)自然遊び体験が少ない（表2）。

興味深いことに、このいじめられっ子群は、(6)町内の大人と挨拶を交わしたりする率は最も高く（表2）、塾に通っていた割合も最も高い（表2）。親の眼差しの届かないところで、配慮能力を持った大人とコミュニケーションする習慣を形成しているのかも知れない。逆に、いじめ属性をもって成長した子どもは、町内の大人たちと挨拶したり会話したりするのが割合が低い（表2）。このことから、ここでもいじめが子ども社会の中で再生産されているのではないかといったことが予想される。

【その他】

いじめられた経験に由来するものか、いじめられっ子（いじめ-群）および、いじめもしたがいじめられた経験を持つ（いじめ±群）をもつグループの、(1)人間愛に関する項目の自己評価は、予想通り最も低くなっている（表3）。いじめられた経験を持つ子供は、人間愛を抱きにくい傾向にあることが予想できる。

もっとも、初等教育段階の教員を目指す教育学専攻の学生へのアンケートでは、こうした傾向は見えてきにくいだろうことも想像できる。標準的な集団では、実際にはもっと高い割合で人間愛の自己評価が低くなることが予想される。

6. まとめ

いじめをなくすためには、言うまでもなく親の愛情深い観察と指導が必要である。しかし、「いじめ0群」（いじめたこともいじめられた

こともない)といじめられっ子だった「いじめ-群」は、ともに兄弟が少なく、家庭外の保育期間が短く、共働き率も低い。驚くべき共通性である。

対照をなしているのは、まず弟妹の存在である。「いじめ0群」では、弟妹を持つ割合がもっとも高かった。「いじめ-群」(いじめられっ子)では、弟妹がいる確率が最も少なかった。それと、自然・家族・社会体験(自然環境/自然遊び/地域行事への参加/家庭での食事)の有無の2つである。

女子大である本学学生の場合、「いじめ0群」は共働きせず家庭にいる母親によって姉として育てられていることになる。傾向から見えてくる子ども像では、学童には行かず、祖父母宅へも預けられていない。親の目の届くところで、弟妹や母親と遊びながら成長し、やがて友達と遊ぶようになる。塾へ行く率も最も低い。家庭で教育を受けているのだろう。

弟妹を思いやり、面倒を見、導くことを期待する母親の眼差しと言葉がけの元で成長してきたはずだ。責任と勇気も育まれていることだろう。人間関係の中だけではなく、自然の中で自然と遊んできたことも、そのストレスを軽減していたのではないか。

これに対していじめ属性をもつ群(「いじめ±群」)を観察すると、いじめの体験といじめ行動の習慣化には兄弟姉妹関係が深く関連を持っていることが見えていた。兄弟にいじめられた経験が、いじめっ子を生み出しているシステムの存在が想像できる。

家庭外保育期間が長く、家族一緒にの食事をする機会が少なく、兄弟姉妹が多い家庭環境で育ち、両親は共働きなので兄弟姉妹を中心に遊びながら成長した(学童、親戚の家での遊び)グループに、いじめ属性が現れやすいようだ。家族の日常的コミュニケーション(家族一緒にの食事をした確率はいじめ属性群が最も低い)の中で、いじめっ子をうまないように指導する必要がある。

少子化時代の子どもたちに、友人たちとのコミュニケーションの機会を与えただけでいじめ

がなくなるのではない。適切な指導と人権的な価値の重要性を教えつつ見守る大人の関与が不可欠と考えられる。

いじめられっ子群は、いじめなし群同様に、共働きせず家庭にいる母親によって育てられている。学童には行かず、祖父母宅へも預けられず、弟妹や母親に遊んでもらいながら成長して、やがて友達と遊ぶようになる。しかし、塾へ行く割合は最も高い。

他方いじめられっ子は、自然環境や自然遊びが最も少なく、地域行事への参加もなく、親の目の行き届かない友達の家や塾で放課後を過ごしていた。またこの群の一番の特徴は、弟妹がいない(弟妹のいる確率が少なかった)ことである。年少者への思いやり、言い換えれば年長者であることの自覚や行動を体験的に学ぶ機会の少なさが、いじめを拒絶できない原因となっているのではないだろうか。年少者に対して行なってはいけないようなことが自分に対してなされた際に、「そのようなことは不当であり、行なわれてはならないことだ」と気づかずに抵抗しない(抵抗の仕方がわからない)といったことも考えられる。

弟妹のいない子どもたちには、意識的に「小さい子どもが近くにいたら、あなたはお姉ちゃんなんだから優しく遊んであげるのよ」「弱い者いじめしちゃダメよ」と、幼少者への配慮と年長者としての自覚と正義観を育む必要がある。このことが、友人間でのあるべき正しい行動についての理解を定着させ、そのことがいじめられっ子にならないための秘訣でもあるのではないかと考えた。

(その他)

大学院進学に関しては、いじめられた経験のないいじめっ子だった「いじめ+群」が最も進学の希望を抱いていた(15.8%)。いじめなし群の学生たちが大学院進学を希望するのは、3.6%と非常に低率で、彼女たちはすぐにも現場に出て教員になりたいと考えている。

いじめられっ子だった学生は、教師にはならず一般企業への就職を考えている割合が高いのも特徴だ。彼女たちにとっては、子ども社会よ

りも大人社会の方が居心地が良いのだろうか。

参考文献

「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」
（令和元年度調査）、独立行政法人国立青少年教育振興機構、2021年3月

https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/154/（2022年12月1日閲覧）

付記

教育学専攻1回生必修の大学入門科目である教育学入門演習IIのプログラムの一部として、道徳・人権上の社会的解決課題である「いじめ」を軸にした統計調査の学びを実施した。兄弟姉妹関係といじめ、また生活体験、自然体験と価値観の成長等を軸にした調査論文も、今日数多く出されている。興味を持った学生の主体的な学習の道を開く機会になったのではないかと考えている。